

打撃を受け、まあ撤退ということで、撤退にかかったこともありますが、何分相当な負傷者や犠牲者が出ております。

この負傷者を早く担架で送り出さないことには、自分たちは撤退するわけにはいかない。その患者を後方に送るまで、ここで一応頑張っていたわけです。患者がいよいよ輸送完了した時点で、私たちも撤退し、また前線に向かったのであります。

全県までは敵が追ってくるものでありますから追撃されるたびに山に登り応戦し、また撤退しては、山に登って応戦ということで、全県まで辿りついたわけでありませう。全県の橋がちょうど焼け落とされて通れないということで、浅瀬を見付けて歩いて渡河したことを記憶しております。それから全県で、いよいよ撤退にかかりましたところ、突然敵が追撃してこなくなったのです。

八月二十五日ころ、大隊本部に集合、部隊長から終戦の詔書の朗読がありました。

これで私の長沙・桂林作戦の労苦談を終わります。一年四か月の長い戦闘期間で犠牲者の出た数は戦死、戦病

死合めて約一五〇〇人及び負傷者が約一五〇〇人程度を出して、復員集結地で復員業務に従事しました。

## 連隊本部行李中隊

宮城県 鈴木正禧

私は大正十年十一月七日生れで、昭和十七年五月十五日教育召集として東部三一部隊に応召、六月十三日引続き臨時召集により一時、東部二部隊歩兵砲中隊に編入、七月二五日歩兵第百四連隊に転属のため仙台出発。二七日宇品港出帆。八月二日呉淞港上陸、八月二日湖南省当陽に到着し、歩兵第百四連隊本部大行李班に編入されました。

大行李は民家を改造した所で向い合って二個班でした。私たち初年兵は一班五人、二班五人と向い合って暮すことになり、これが戦地での第一歩でした。翌朝、軍馬「仙垣」を渡され、手入れをしたのが作業の始まりです。十月には警備地清溪河附近にはもう雪が降り、馬の手入れ

は大変でした。

十八年二月、江北殲滅作戦が本格的な初陣ですが、資福寺から行動を開始後熊家河附近で敵と交戦前進中「パン」と音がすると同時に羽黒上等兵の軍馬「青木」が私の左眼を蹴り、夜、担架で後送、沙市第一野戦病院に入院して、二〇日間で退院しました。

部隊は荆州に移動、五月には江南殲滅作戦参加しました。雨期のため毎日大変苦労しましたが、特に強い雨が頭から腹を通して流れ、それに種芋を食べたので作戦終了後赤痢になり大変でした。年がら年中、作戦々々の連続でした。

一年で上等兵になりましたが、古い兵隊に夕方になる  
と「上等兵集まれ」と毎日毎日が大変で、こんなことなら上等兵にならぬ方が良かったと思いました。

荆州では、同村の橋本学、柳渕信次君が南京から幹部候補生終了後連隊本部に立寄り、大変なつかしく思いました。

十八年七月、沙市附近の警備に移動した時、赤痢が悪化し、軍医に見てもらって大変叱られ、早速入院したが、

一日血便が三五回も出て悪くなる一方でした。そんな或る日、隣の戦友が死にました。これで私も死ぬのではと思いい、クレオソートが十五粒ばかり余っておったので、死ぬ前にと、全部飲みましたら、不思議と血便が固い便になり、大変早く回復し退院となりました。

常德作戦は病後のため参加できず留守隊となり、体重も六〇キ以上となり、行動するのには大変でした。

十九年三月、連隊砲、連隊機関銃、通信の各行李が連隊本部行李に合併。また、師団輜重連隊から八〇人の転入があり、行李二班、弾薬六班、総勢二二〇人にもふくれあがり、連隊行李中隊編成で湘桂作戦の準備に入りました。

四月には飯海少尉が弾薬班に着任。湘桂作戦開始のため漢口附近に集結。五月湘桂作戦参加。六月第三次長沙作戦。六月より八月にかけて衡陽作戦で脩県へ転進して、来陽へ突入占領、来陽附近の警備につきました。

特に思い出深いのは渡河作戦でした。それは私は金槌（泳げない）だからです。七月江口渡河、八月来陽、鉄関鋪、零陵へ進出、九月全県作戦と夜行軍ばかりでした。

また、空中戦を見ることもありました。

稲刈をして新米を作り、食糧を確認して、いよいよ桂林、柳州攻略戦へと突進したのです。桂林の桂江を渡河し、十一月宜山、南丹、独山作戦と進撃したあたりでコレラ菌が川に流れたというので水を飲まぬようにと伝達されました。

十一月二八日、南丹で第七中隊が敵列車を捕捉したあと、中隊が通過しました。列車の中には難民や荷物が山積みしてあり、道路にも荷物が散乱していました。朝が大変寒くて、「戦闘」はこんなことかと思いました。

十二月三日朝、独山後方の高い山で小休止をしていると、敵機が低空で飛んで来ましたが、どうすることも出来ず軍馬とともにただ伏せるばかりでした。敵機は二、三回旋回しながら襲撃し、機銃や機関砲弾が雨霰のようでした。その時、私の後友が足の踵を射られて大変でした。

独山では弾薬庫から火災が発生して、村田曹長戦死外負傷者も何人か出たようでした。三日独山出發反転、麻尼、六塞墟、丹南、温平、十二月十六日より、連隊本部

主力は思恩附近の警備で正月を迎えることになりました。その間、敵襲のため分哨や警備で大変でした。

宜山、金城江へと反転するのですが、金城江の渡河点では敵襲があり、兵の戦死負傷が相ついで、米山町出身の第四中隊加藤忠吾上等兵もその一人です。後送され復員しました。

二〇年三月、海福三千雄連隊長が転任、野口連隊長が着任しました。二〇年五月、湘桂反転作戦、宜山附近に集結して桂林に向け出發しました。桂林到着後、附近の警備及び次期戦闘準備のため義寧県にて警備しました。

七月十八日、節部隊（独立混成第二二旅団）に連絡兵として毛利兵長以下各班より一人ずつで、第二班からは私でした。週番の沢田軍曹に報告して出發、途中渡河して前進して行きましたが、前方より頭だけ擬装した兵隊が二人こちらへ進んで来たので、「何処の部隊だ」と呼んだが返事が無いで、私が確かめるため前進していきました。

味方には援護してくれと言って、五、六〇は進みましたが、前方の兵は部落や高い所に散開し始めたので、私

は後退し、毛利兵長と話し、私外一人が中隊に引返し、白鳥中尉に報告、石川軍曹以下二個分隊の応援隊と共に、敵が集結している部落に、白鳥部隊の指揮によって進みました。その時「連絡兵が先に」と言うので、私が一番先に前進しました。

細道をまわり始めたところ、敵軽機関銃の音と共に敵弾が飛んでくるので、夢中でゴロゴロと細路に沿った水路に入りました。その時、山田博上等兵は軽機を手に戦死しておりました。大変だと思いい水路に沿って後退し大木の下で小銃で応戦し、弾丸二発を残して退きながら、一寸稲の中に腰を下ろしました。

すると、敵迫撃砲弾が四方に絶え間なく落下しました。私は肩が棒で殴られた様でしたので、手を上げてみたら、傷はあるが大丈夫と、渡河点へ向って走って後退したら、私が一番最後でした。早速医務室で、軍医さんの手で、迫撃砲の破片を取り出し、手入れは毎日でしたが、今でも片肩は使えません。

その後の情報では、敵の一個連隊が到着したばかりとのことでした。戦死者は山田博上等兵、佐藤静夫上等兵

の二人、負傷者は石川嘉見軍曹が重傷で後送され、他は私以下三人位位だと思えます。義寧県の話は、一生の思い出の一つです。それは昭和二十年七月十八日でした。七月末反転、第二次行動開始して衡陽に向け出発。八月二十四日、衡陽城外西北三キロの三盤橋で、命令に従い無念の軍旗の奉焼式が挙行されました。

しかし、部隊はその後も依然として完全武装のまま自主行動で、十月、江西省の鄱陽湖畔、湖口東北地区にて遂に武装解除を受け、抑留生活に入りました。失望と落胆が重複して、敗戦という最大の悲惨な生活がはじまったわけです。

連隊本部は流斯橋に、各隊はそれを中心とする部落に合宿。廟や空家を利用してそこへ薬を敷いて、豚のような生活でしたし、給与は中国側からの交付です。自らが困苦欠乏に耐える以外には何もものもなかったのです。

或る時は、農耕の手伝いによる食事かせぎで、一食でも残っている戦友に食わすための手段として真夜中の一時、二時までもです。南京袋を持参して、野菜をカップラって来る仕事も楽ではありません。泥棒ですから……。

使役で一番良いことは米つきでした。戦友と談合して米をカッパラって満腹になるまで食うため、生命の危険を感じながら内地送還の一日も早いことを待ちました。異国中国の流斯橋の山中で俘虜の身の厳しさと、敗戦の厳しさを味わったわけでありませぬ。

翌二一年五月帰還命令ができました。実に十か月の間、並々ならぬ辛苦を味わい、涙を飲み、激励し合いながら、ただひたすらに祖国への帰還を念じていました。

これで中国の抑留生活も終始符を打つことができました。九江から乗船、揚子江を下り南京上陸、無蓋貨車で上海へ。昭和二十一年六月八日、無事博多へ上陸復員しました。今もって共に戦った幾多の戦友とともに、陣没英霊の記憶が脳裡に刻み込まれ、我々は生涯忘れることはないでしょう。

今後とも戦争など起こらぬことを祈願し、永遠の平和への願いを子々孫々まで語り継ぐことを念願してやみませぬ。

## 南支の戦闘

福岡県 松添 久

私は昭和十七年二月十日、小倉の連隊に潮兵団補充要員として集結し、南支那へ行った。現役ですから召集ではない。私は五男に生まれ、長男は杭州湾で戦死しました。長男は当時、大村で二十一海軍航空廠、大村海軍航空隊、大村連隊等への物資輸送を行う運送業をやっておりましたが、長男が戦死後は、私が十六歳から一家の大黒柱として働いていました。

徴兵検査は第一乙種ということで小倉連隊に入営しました。四男がビルマで龍兵団の中隊長をしていたが、十九年十一月二日に戦死、三男は現地満期しましたが、当時内地に帰りますとすぐ召集が待っておりますので、久留米の騎兵連隊に入営、北満警備から、満州国の鉄道警護隊に入りました。次男は小さいときに亡くなり、五男の私が一家を支えていましたが、入営により運送業を捨